ろ が Anniversary

## 85周年を顧みて

## 徳島市民病院 院長 惣中 康秀

85年とは露口病院事業管理者が市民病院の歴史を詳しく調べられ、昭和3年に市立実費診療所ができてからの年数であります。その2年後に市立中洲病院となっております。つづいて新蔵町の市立市民病院、戦災で焼失後市立診療所、寺島本町の市立市民病院、北常三島の市立市民病院、現在の市民病院へと変遷してきております。院長室に飾ってある院長の写真では、14人の院長の移り変わりがあり、私で15代目となります。(実際は複雑で間に抜けている方もありもっと多いようですが…)。徳川幕府では15代将軍は慶喜にあたり以後は明治維新に変わっていく大きな転換期にあたります。市民病院はこの85年の間に、地域住民のためその時代時代にあった医療をするべく建物だけでなく、医療器械、医療技術も高度に進化してまいりました。特に近年の変化には目を見張るものがあります。CT、MRI、PET-CT、内視鏡医療器械など検査診断器具にも進歩が著しく、数年もすると時代遅れの画像になってしまいます。そのため設備投資に膨大な費用も掛かるようになりました。

医療において外科系に関しても手術方法・内容が大きく変わってまいりました。外科に関しては鏡視下手術が主流になってまいりました。それに伴い平均入院日数が10日前後という昔では考えられない少ない日数になってきています。

医師数に関しても以前は総定員法の縛りから研修医を採用できない病院でしたが、初期臨床研修医制度がはじまったことをきっかけに、研修医を採用できる病院となり、定員も基幹型初期研修医を2人から10人まで徐々に増やし、この上に三病院連携初期研修医(市民病院・大学病院・県立中央病院)も受け入れるようにして若い研修医が常時10~20人院内で働いているようになりました。このことにより高年齢化してマンネリ化していた医局内も、若い元気な医師が入ることで活性化し雰囲気が変わりました。院内のほかの部署においても新病院に変わる時に看護師の若返りがあり、クリニカルラダーシステムも軌道にのって成長しております。院内外の学会・研究会活動も活発となり、多部門の認定看護師も増えチーム医療が充実してまいりました。

また地域医療連携も充実し、一人ではできない医療すなわちチーム医療を行うことで、診療所・病院・在宅の切れ目ない医療連携"地域完結型医療"ができるようになってまいりました。病院全体としても病院機能評価に合格し、地域医療支援病院・がん診療拠点病院・地域周産期母子医療センター・災害拠点病院および DMAT 指定病院などの認定をうけ、地域の中核病院としてグレードアップしてきております。

ダーウィンが進化論で述べている『最も強いものが生き残るのではなく、最も賢いものが生き延びるわけでもない。唯一生き残るのは変化できるものである!』の言葉通り、市民病院は生き残るべく変化してまいりました。今後も時代の風を読んで変化・進化していきます。

今後も90年、100年に向けて『思いやり·信頼·安心』の理念のもと現状維持ではなく、進化・発展して少しでも地域の医療に貢献できるよう努力してまいります。

## 歴史ある公立病院のさらなる飛躍を

徳島市病院局長 後藤田 勲

徳島市民病院が85周年を迎える年に病院局長として在職し、こうして記念誌を発行できたことは大変嬉しく思っております。

私は徳島市役所に勤めて今年で36年目となりますが、これまでの間、市長部局での勤務が長く、 平成21年4月に市民病院に異動するまでは市民病院での勤務経験はありませんでしたので、これまでと全く違う環境の中で自分は何ができるのだろうかと大変不安でした。一方で、新病院の建設も既に第1期工事が完成し、新病院での診療も始まっていたことから、新しい病院での勤務のスタートとなり、こんな素晴らしい病院で仕事ができるのかと身の引き締まる思いであったと記憶しております。新病院の建設も第2期工事の真っ最中でもあり何かと落ち着かない雰囲気ではありましたが、平成22年3月には全ての工事が完成し新しい病院に生まれ変わりました。

現在、市民病院での勤務も4年目でございますが、未だに、多岐にわたる職場の業務内容等を皆さん方にお聞きしながら、露口病院事業管理者の補佐としての務めを何とか果たしているところでございます。

今申し上げましたように、私は新しい病院が完成してから勤務しているものですから、旧の病院のことは知りませんでしたが、市民病院が昭和3年2月に開設され県内で最初の公立病院であると知ったときは驚いたものでした。長きにわたり市民から愛され続けた賜物であり、今いる私たち職員の一人一人がこの機会に今一度、この歴史と伝統のある病院に誇りを持つとともに、85周年を一つのステップとして、さらに将来に向かって飛躍することを願わずにはいられません。

さて、新しい病院が完成し、急性期医療を担う地域の中核病院として、地域の医療機関との機能分担や連携を図りながら、職員が一丸となって医療サービスの向上と経営基盤の強化に取り組み毎年確実に成果を上げてきておりますが、これまでの間、病院経営は決して順調ではなく先輩の職員の方達が大変苦労されてきました。

経営面を振り返ってみますと、平成21年度まで赤字決算が長らく続き、不良債務も発生するなど厳しい経営状況が続いておりました。そのため、経営改善に向けて、「病院事業の今後の経営に関する計画(計画期間:平成10年度から平成14年度)」及び「第2次経営改善計画(計画期間:平成15年度から平成18年度)」を策定し、業務の委託化を推進することなどにより経費の削減に取り組んでまいりましたが、この間に診療報酬のマイナス改定や入院患者の減などにより、収支計画を下回る厳しい経営状況が続いておりました。そこで、病院の経営形態もより独立性の高い組織として、平成18年度から地方公営企業法の全部適用に移行し病院事業管理者を設置するとともに、新病院建設を機に新たに「新病院経営改善計画(計画期間:平成19年度から平成28年度)」を策定し、効率的な病院経営により不良債務の解消と単年度収支の均衡に向け職員が一丸となって経営の健全化に取り組んでまいりました。

その結果、平成22年度及び平成23年度において黒字決算となり、不良債務も解消され、一歩ずつではありますが、経営健全化に向けた取り組みも成果を上げてきていると感じております。

市民病院は地域における中核的な公立病院として、地域医療に重要な役割を果たしておりますが、将来にわたって地域で必要とされる医療を安定的に提供し続けることが市民病院の役割であると認識しておりますので、90周年、100周年に向けてさらに飛躍してまいりたいと考えております。